



青山台の家



道路に面した植栽帯が街並みをつくります

情感のある植栽帯をつくる

エクステリアデザイナー＆講師として活躍する松井信氏の大反響連載第4弾は「植栽」。情感をイメージして空間の魅力につなげ、生活の中で緑に楽しみを感じていただけるような植栽計画のコツを伝授。実践的と好評のパースの授業は、点景のテクニックを学びます。



松井 信 (まつい まこと)

株式会社アトリエグリーンス 代表取締役
E&G アカデミー 講師
中央工学校 OSAKA 非常勤講師

1977年奈良県生まれ
2000年近畿大学理工学部建築学科
環境デザイン卒業
建築パース事務所、エクステリア&ガ
デン 設計施工会社勤務の後
2011年アトリエグリーンス設立
2016年グッドデザイン賞 2016受賞
/角地のオアシス、2017年平成29年
度エクステリア優秀技能者顕彰 設計・
プランニング部門受賞

植物の広がる力が空間をつなげ 心豊かな時間をもたらす

エクステリアをつくるうえで欠かせない植栽。植栽を通して時間軸が生まれ、空間がさまざまなものとながっていきます。そんな「広がる力」が植物にはあります。まず植栽があることで、街並みに潤いやコミュニケーションのきっかけが生まれれます。また植物という時間や季節とともに変化するものがあることで、お施主様の日常と密接に空間自身が関わる機会が増えます。変化を通じて心の動きが生まれます。もちろん楽しみばかりではありません。枯れることもありますし、虫がついて嫌なこともあります。そんな悲喜こもごもの時間が心を豊かにしてくれるように思います。

植栽を植えるときに気をつけるのは、いくつかの要素を組み合わせながら、存在感を消しながら、自然になじむように...そんなことを心がけています。第一印象で「いいな」と思っていたくには、違和感を感じないようにすることが大切ではないかと思えます。

樹木の葉を料理に添えたり 子どもの思い出にも残る植栽を

上の事例の「青山台の家」のエクステリアに関しては、もともとお施主様は植物に対して苦手意識をもっておられ、シンボルツリーだけにしてほしいとご希望でした。しかしながら打ち合わせを重ねるうちに、奥様の想い出のなかに「庭の樹木の葉をお料理に添えていた」ということが残っており、「挿敷(かいしき)に使える植物を植えて、子どもたちの思い出にも残してほしい」といったお話が出てきました。それで、モミジなど挿敷に使えるものを植えたり、ジュンペリヤーやレモンなどお子様と収穫して食べられるものも植えています。

楽しみのある植栽だけでなく、それぞれの樹木の名前を知ってもらうこともとても大切です。人間同士も名前を知ると一気に距離が縮まるのと同じで、植栽の名前を知り、距離を縮めてもらうように樹木の名前リストの作成や樹木に名札を取り付けるようにしています。

玄関前の限られた空間ですが、アプローチの両

脇に植栽帯を確保しています。石なども土留めに使いながら足元を立体的に構成し、ニオイバンマツリ・ギボウシ・フウチソウ・コマユミ・ヒカゲツツジ・ダンコウバイなど、さまざまな下草を随所にあしらっています。足元に表情がつくことで、構造物との関係を軽やかに見せつつ空間自体を土地になじませています。両脇の伸びやかなアオダモ・モミジ・ヤマコウバシなどの樹木の間を抜ける瞬間は、自然と気持ちがワクワクします。木漏れ日もホッとした安心感を与えてくれます。

立体感と透け感のある植栽帯が 街の風景としても楽しめる

下の事例の「真弓の家」も、玄関前の階段脇の植栽を石や苔で立体的に構成し、階段脇を隠すように低木を植え、門扉が見え隠れするように樹木を配置しています。立体感と透け感のある植栽帯が空間に表情をつくっています。道路脇の帯状の植栽帯も同様に盛り土をし、立体的な表情をつくっています。

樹木も高木・中木・低木を組み合わせ建物とのボリュームバランスをとっています。アオダモやさまざまな樹種の木々が四季の変化の表情を見



真弓の家



せ、ナツハゼ・ヤマコウバシ・ツリバナ・イジュ・シャリンバイ・コマユミ・ムラサキシキブ・ホルトノキ・アセビ・ビバーナムティヌスなど、街の風景として、地域の方も含めて、時間の変化を気づかせてくれ楽しませてくれることを期待します。

